最優秀賞

神奈川新聞社長賞

人のためには自分のため

伊勢原市立中沢中学校
一年　田中希美

イギリスのＢＢＣ放送の「盲目の人が困っていたら?」という実験番組についての記事を読んだ。視覚障がい者の人の生活上の困難を非障がい者の人にも知ってもらうという企画だ。

その内容は、視覚障がい者の人が横断歩道を渡れずに困っていた時に、ロンドン市民が助けてくれるかというものだった。しかし助けに出る市民は現れず、困っている視覚障がい者の人に一番最初に声をかけて助けたのは日本の留学生だったそうだ。更に別の場所では視覚障がい者が横断歩道の途中で信号が変わってしまうというより危険なケースにして実験を続けた。すると、またも助けたのは日本人であったという。手助けした人は、自転車に乗っていたのだが、すぐに自転車から降りて実験者にかけ寄り「信号が変わって危険な状況です、

お手伝いしてもよろしいですか？」と尋ねて、危険な状況から助け出したという。
私はこの記事を読んで、とても誇らしい気持ちになった。と同時に自分は同じ日本人として、そのような行動が出来るのかという気持ちにもなった。
もし同じような状況になった時、きっと私は助けることが出来ないと思った。なぜなら私には、助けるスキル（助けた経験）がたりないからだ。おまけにほんの少し勇気がたりない。それにどんな助けが必要なのか、分からない。困っている人がいたら助けようとする気持ちはあるのだが、そこから行動に移すまでの一歩がなかなか出ない。
私の周りで、進んで困っている人を助けているのは母だ。どういう気持ちで人助けをしているか聞いてみた。「人のためにした事は、必ず自分もしくは自分の大切な人に、巡り巡って返ってくると信じている」と言うのだ。
しかし母は、必ずしも上手く助けられているわけではないというのだ。
電車でお年寄りに席をゆずろうとしても、「次なので」と断られたり、目の見えない人に後ろから声をかけて驚かれてしまったり、横断歩道の途中で止まってしまったおばあさんの背中を押して歩道まで進めようとしたら「痛い」と言われたり、失敗だらけだという。でも知らない事や分からない事だから、試行錯誤をして覚えていくしかないのだと言う。
例えば、ベビーカーを押しているお母さんの苦労は、母は経験しているのでよく分かるそうだ。「助けてほしい」と言われなくてもどう手助けしたら相手が助かるのか想像がつくと言う。しかし、障がいのある方や高齢の方は、どういう助けがいいのか、ベストアンサーが分

からないそうだ。だから、試してみるしかないという。できれば困っている人が気軽に声をかけられる世の中になるといいと言っていた。

以前、母と歩いていたら手押し車を引いたおじいさんに声をかけられた。おじいさんは自動販売機で飲み物を買いたいが、背が届かなくて買えないのでかわりに買ってほしいと言うのだ。母は嬉しそうにお手伝いをしていた。

このおじいさんのように自ら、助けを要請することはとても有意義だ。援助を必要とする人はもっと「どういう助け」が必要かを発信した方がいい。その方が助けやすいのだ。助けを求める事を遠慮しないでほしい。手助け出来る事は喜びでもあるから。

私は「人のためにした事は、巡り巡って必ず自分もしくは自分の大切な人に返ってくる」という母の思いを心に刻み、困っている人を勇気を出して助けたい。失敗もスキルアップにつながると信じて。

助け合いで世界中にもっと幸せな笑顔の連鎖が起きると思いたい。